

# 宇宙樹 Yggdrasill



会報 2011 年 1 月号  
復刊 No.189 (2011.1.16 発行)

北欧文化協会  
112-0014 東京都文京区関口 3-13-4  
TEL (03) 3941-9792

<http://www.hokuobunka.org/>

本誌名「宇宙樹」の由来 北欧神話の根幹をなし、天・地・地下の三界を貫く巨大なトネリコ(イグドラシル Yggdrasill)の樹にちなんだもの

協会創立：1949.10.  
本誌創刊：1956.03.

【2010 年 12 月例会報告】

12 月 13 日 (月)

## 「フィンランドの家族の在り方 ～ 移り変わりと現状」

坂根シルク (フィンランド語通訳・翻訳家)

豊かな福祉国家としても知られているフィンランド。家族の在り方はどのように変化してきたのか、そして今日の家族とは。

共和国でありキリスト教(福音ルーテル派)を信仰している現在のフィンランドには階級や上下関係は存在しない。1906年、まだロシア帝国領だったフィンランドの女性は世界で3番目に選挙権を、そして世界で最初に参政権を取得した。翌年には19名の女性議員が誕生した。そこから男女平等を重要視する社会がスタートしたのである。現在のフィンランドではほとんどの成人女性がフルタイムで働いており、大統領を始め首相を含む20名の大臣の内12名が女性である。

フィンランドでは子どもを社会の財産だと考え、子どもを歓迎する様々なシステムがある。例えば出産後に国から支給される育児用の母親支援キット(1938年に低所得者向けの支援として始まり、1949年からすべての母親に支給されるようになった)。また、1920年代にスタートした、妊娠中から就学前までの子どもとその家族の健康と成長を支援する「乳幼児ヘルスケアセンター」(neuvola・ネウヴォラ)のシステム。産休を含めた育児休暇は約11か月間(父親の育児休暇は3週間)、その間国から手当も支給される。基本的に残業もなく病欠などを容易にとることができ、仕事と家庭のバランスを保ちやすい環境がある。

過保護な日本社会に対しフィンランドの社会は自立主義である。「自分のことは自分でやる」が基本的な考えとなっており、自分でできなくなって初めて他の人に助けを求めることができる。国民性もあるかもしれないが、高齢者もできるだけ長く自宅で自立した生活を過ごしたいと願い、それを充実した高齢者福祉制度がサポートしている。

25歳から54歳の女性の85%が働いており(男性では90%)、その内21%(男性では10%)がパートタイムの仕事をしている。共働きが当たり前である為、父親は母親と同様に子育ても家事も行う。平均的勤務時間が8時から4時となっており残業もほとんど無い為、夕食を家族で一緒に食べてからそれぞれが習い事(スポーツや音楽など)や趣味を楽しむことができる。サウナは週1回から2回家族で入り、週末や休みは家族一緒に過ごす。2世代や3世代と一緒に住むことは珍しいが、親とは頻りに連絡を取り合い定期的に訪ねる習慣がある。また、年齢に関係なくスキンシップを大切にする。

親子でも上下関係はあまりなく、子どもは自分たちと対等な人として考え意見を尊重する。人と比較することを嫌うフィンランド人はそれぞれが違うことを当たり前とし、家庭の中でもそれぞれ違った立場にいる者としてお互いを尊重・尊敬する。原則としてしつけは家庭で行うものと考え子どもには家族の一員としての家の手伝いをさせ、将来社会の一員として責任を負える人となるよう育てるが、残念ながら最近ではしつけをしない親が増え、モンスターペアレントの問題も存在する。

フィンランドでは子どもを自分の“所有物”と考えず、個々の存在として尊重する。これは子どもの

---

進路、将来の職業、友人や結婚相手について親が口出しをしないことでもある。親が子どもの自立を促すことで子どもが20歳前後に家を出るのは一般的である。そして同じ町に住んでいても別々に暮らすことを好む。これは親も子どもと同居しながら、自分達の生活を大切にするからである。子どもは一度家を出たら親を頼らず、自力で生きることが普通だ。また、親も子どもには精神的にも経済的にも頼らず、できるだけ長く自分の力で生活をしたがる。その為、多くの高齢者はウォーキングなどを日課に体力を維持している。

しかし、家族の問題点もたくさんある。特に離婚や子連れどうしの再婚（“ニューファミリー”）などで子どもの抱える精神的問題がとて多くなっている。仕事やアルコール依存症などが原因で子どもにかまっていられない親が増えており、給食が唯一の食事であることも珍しくない。

### 典型的な日本の家族との違い：

#### 日本

- ・子育ては母親の仕事
- ・母親は子どもに熱心に手を掛け父親は見守る
- ・献身的な母親が多い
- ・母子が中心となっている

#### フィンランド

- ・親2人で育てる
- ・母親も父親も眼は掛けるが手はあまり掛けない
- ・子どもの為に自分達の生活は犠牲にしない
- ・夫婦が中心となっている

翌日は氷山クルーズ、ここイルリサット・アイスフィヨルドは世界遺産に指定されています。海岸に行くと多くの漁船が繋がれてあり、獲れたばかりのタラやオヒョウが積みまれています。「乗りなさい」と指し示された船は船底に雪が積もっているもので、北の果ての荒々しい環境をあらためて実感させられました。

濃いインク色の海には大小の氷山が無数に浮かんでいて、さまざまな形をしています。巨大な岩山にあいた洞窟を思わせるもの、ギアナ高地のテーブルマウンテンやナミブ砂漠の砂丘を思い出させるもの、とがった鉛筆を幾本も束ねたように棒状にそそりたつものなどなど。極北の海の2時間クルーズは耐えられない寒さではありませんでした。

犬ぞりツアーでは、14頭の犬が2~3人乗りのそりをひきます。犬ぞりは雪原を走るものと思っていました。しか

し、この地の犬ぞりは小高い岩山を駆け上り、谷底に駆け下ります。むき出しの岩盤の上をむりやり引っ張り、ガタッ ビシッとたいへんな荒っぽさで滑っていきます。時々身体が宙に浮きます。私はギブアップです。しかしスリルを楽しむ若い人びとは大いに喜んでいました。

ところで北の雪国といえば、子どもたちはサンタクロースを思い浮かべるでしょう。サンタクロースは北欧諸国でひっぱりだこのようです。フィンランドのラップランドの山に住んでいるというのが最も一般的ですが、ノルウェーでは、妖精ニッセのいるわが国こそ原点のサンタの国だと言われました。ここグリーンランドでもサンタクロースが住むとされており、「グリーンランド国際サンタクロース協会」なるものが設立されています。(つづく)

---

### 【次回例会案内】2月例会

講演：『カレワラ』の土地はフィンランドのものか？

—民俗学者マルッティ・ハーヴィオのカレワラ研究と「大フィンランド」運動をめぐって—

講師：石野裕子（津田塾大学国際関係研究所研究員・法政大学非常勤講師 本会会員）

日時：2月7日（月）18：30～21：00

場所：京橋プラザ区民館（中央区銀座1-25-3）

会費：1000円 学生500円（正会員は無料）

---